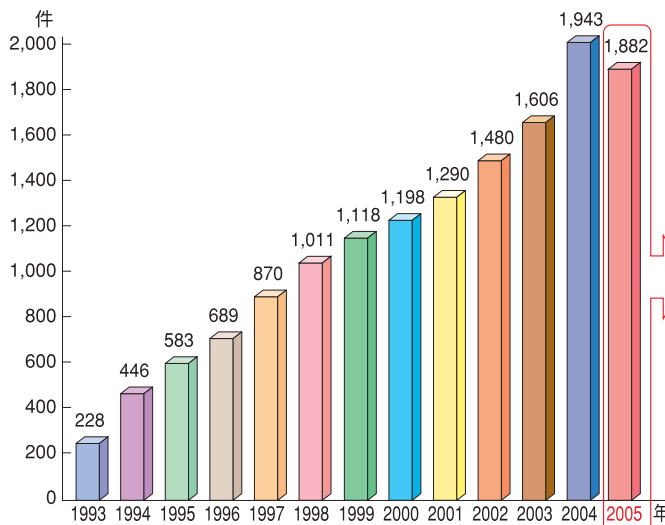


赤十字血液センターに報告された非溶血性輸血副作用 -2005年-

2005年の1年間に医療機関において輸血による副作用・感染症と疑われ、赤十字血液センターに報告された症例のうち、最も報告数の多い非溶血性輸血副作用について示します。

輸血副作用・感染症報告件数 (医療機関から報告された数、輸血との関連性なしとされた件数も含む)

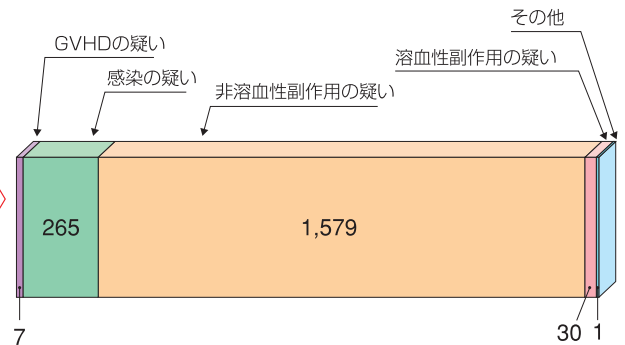
報告件数の推移



報告の内訳

2005年

これまでと同様「非溶血性副作用の疑い」が最も多く、全体の84%を占めています。

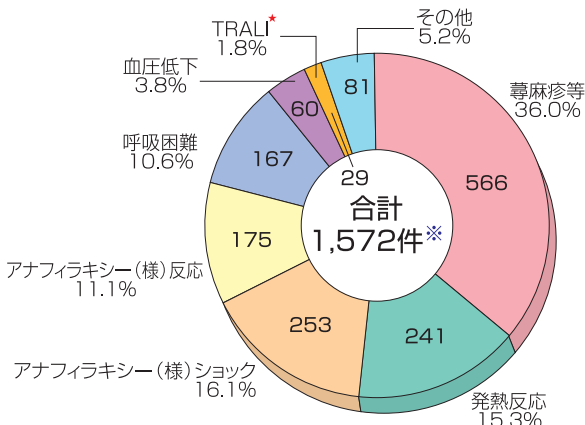


(GVHDの疑いのうちマイクロサテライトDNA解析によりキメリズムが確認された症例:なし)

非溶血性輸血副作用 (2005年)

副作用の種類

副作用の種類別の発生数及びその比率を下記に示します。このうち重篤例が多い「アナフィラキシー(様)反応」、「アナフィラキシー(様)ショック」、「呼吸困難」、「血圧低下」及び「TRALI*」は全体の44%を占めています。



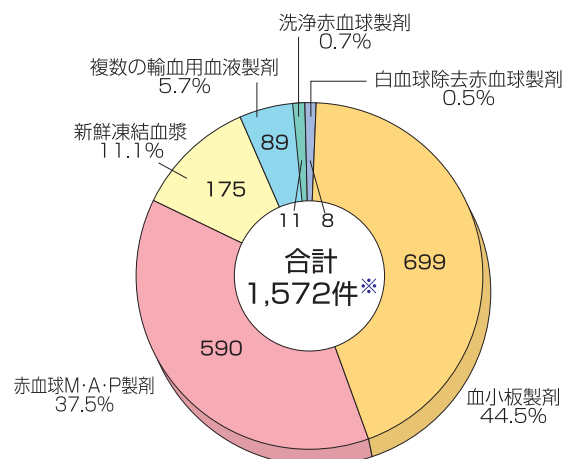
★TRALIについては、確定診断及び疑診断症例の総数であり、また、報告された1件で、同一患者が2回発症している(29件30症例)

《参考》

- 【アナフィラキシー(様)反応】
全身潮紅、蕁麻疹、血管浮腫(顔面浮腫、喉頭浮腫等)、呼吸困難等の複数の全身症状を示したもの。
- 【アナフィラキシー(様)ショック】
「アナフィラキシー(様)反応」に血圧低下を伴ったもの。
- 【血圧低下】
皮膚症状、呼吸困難等の症状を伴わずに血圧低下を示したもの。

使用薬剤の種類

血小板製剤の使用による副作用が多く報告されています。



上記製剤には放射線照射製剤及び未照射製剤の両方を含む。

※非溶血性副作用の報告総数は1,579件であるが、報告後担当医が「輸血との関連性なし」と判断した7件を除外して解析した。

■ 使用製剤・症状別副作用報告（頻度）

2005年

製 剤	血小板製剤	赤血球M・A・P製剤	新鮮凍結血漿
供給本数	703,236	3,292,456	1,276,778
蕁麻疹等	313件（約1/ 2,200）	125件（約1/ 26,000）	94件（約1/ 14,000）
アナフィラキシー（様）反応	102件（約1/ 6,900）	45件（約1/ 73,000）	17件（約1/ 75,000）
アナフィラキシー（様）ショック	124件（約1/ 5,700）	73件（約1/ 45,000）	31件（約1/ 41,000）
発熱反応	58件（約1/ 12,000）	160件（約1/ 21,000）	13件（約1/ 98,000）
呼吸困難	66件（約1/ 11,000）	77件（約1/ 43,000）	7件（約1/180,000）
血圧低下	6件（約1/120,000）	48件（約1/ 69,000）	6件（約1/210,000）
TRALI	13件（約1/ 54,000）	7件（約1/470,000）	3件（約1/430,000）
その他	17件（約1/ 41,000）	55件（約1/ 60,000）	4件（約1/320,000）
計	699件（約1/ 1,000）	590件（約1/ 5,600）	175件（約1/ 7,300）

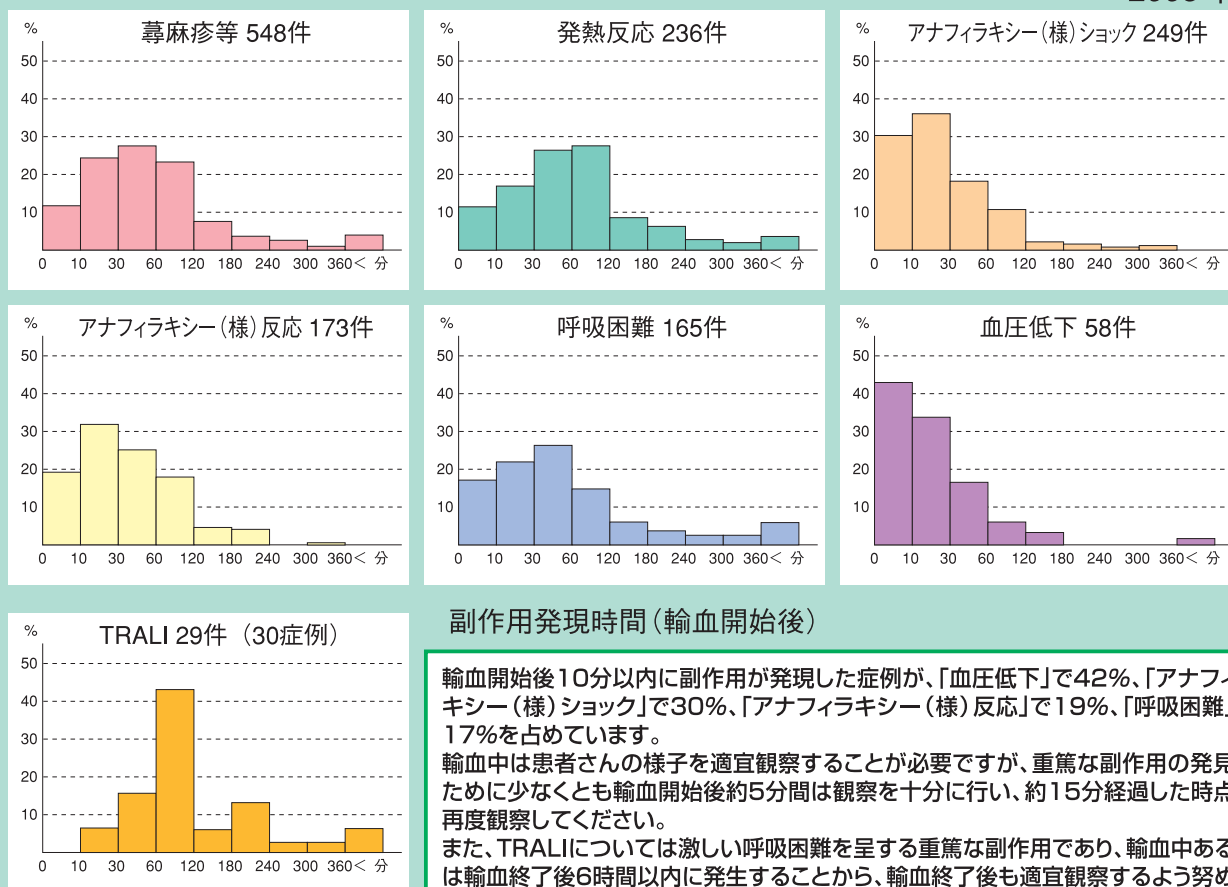
（頻度は対供給本数比）

上記製剤には放射線照射製剤及び未照射製剤の両方を含む。

供給本数に対する副作用報告頻度を使用製剤別にみると、血小板製剤が最も高く、約1,000本に1件でした。
使用製剤・症状別では、血小板製剤の「蕁麻疹等」が最も高く、約2,200本に1件でした。

■ 副作用発現時間（発現時間不明例は除外）

2005年



輸血用血液製剤または血漿分画製剤の使用による副作用・感染症が疑われた場合は、直ちに赤十字血液センター医薬情報担当者までご連絡ください。また、原因究明のために、使用された製剤及び患者さんの検体（使用前後）等の提供をお願いします。
なお、使用された製剤及び患者さんの検体は「血液製剤等に係る選及調査ガイドライン」を参照のうえ保存してください。

《発行元》

日本赤十字社 血液事業本部 医薬情報課

〒135-8521 東京都江東区辰巳二丁目1番67号

ホームページ <http://www.jrc.or.jp/mr/top.html>

* お問い合わせは、最寄りの赤十字血液センター 医薬情報担当者へお願いいたします。